

ノーゲームノーライフ
bulletNight

NW

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

東京某所：都市伝説と言われる『』の下を張る『??』。これは『』と共にゲー
ムの世界へ迷い込んだ『??』のお話。

目 次

Blank challenger (『 』への挑戦者)	1	ティアラ・ニルヴァレン	—
『』と『?』、『鴉』の設定	—	『』と『?』、『鴉』の設定	—
Fantastic World (ゲ ームで全てが決まる世界)	5	死に得ぬ天使と定命の人間	—
Flowering of talent (『?』の本気)	9	痙攣と苦痛	—
悪夢 (nightmare)	14		
ステファニー・ドーラ	17		
異邦人	20		
クラミーヴス『』	24		
女の子を泣かせた罪	28		
	32		
		48	44
		41	38

B l a n k c h a l l e n g e r (『　』への挑戦者)

『東京某所』

とある暗闇の中に光るパソコンに向かう二人の人影があつた。

「あー…やばいまじで死ぬ死ぬ…早くリザつてえ…………」

「ん……」

この二人は都市伝説とも言われた『くうはく』である。ちなみにこの二人は今、『??』というアカウントネームの人物と絶賛ゲーム対戦中である。

「こいつつ…スピードが速えぞ！」

「アイテム…使つて…る…？」

「よし！白はある赤い奴狙え！俺はある紫のを潰す！」

「りょー…かいつ。」

なぜ『くうはく』が『??』というアカウントネームの人物と対戦する事になつたか、それは数

時間に遡る。

——数時間前——

「白…今何時…」

「えつと……夜中の7時?」

ようやく徹夜三日目の朝を迎えた『』はそのままゲームを続けていた。白が空に自分の操作キャラを押し付け眠ろうとした時、

ピロンツ

その音で白は睡眠時間にピリオドを打たれた。不機嫌そうに起きてタブ p cを開き、めんどくさそうにメールを漁る。無数の広告メールから一つのアカウントネームを見つける。

【差出人：『??』】

「にい…挑戦者…来た…」

「挑戦者あ？何で勝負を挑むつて？」

「今やつてるゲーム。」

「ちょっとこつちに送れ。」

白は何も言わずに空のパソコンの画面の一つにメールを写した。

【件名：最強の『』様へ】

【内容：はじめまして『』さん、あんた強いんだって？ランキング3位の俺と戦え。時

間は15分後、俺の作ったワールドに来てくれりやいいよ。

「…ん? なんでここだけ韓国語なんだ?」

「アカウント…ネーム…も…ハングル文字…韓国語が得…意?」

「まあやつてやるか。久々の挑戦者だし。」

樂している。
??????
“ ”。

んじやまた。】

と、こんなことがあり今に至る。

「はあつ…勝つ…たあああつ!!!」

「この人…強…い…」

勝利の余韻に浸つて『^{くうはく}』に再びメールが届いた。

【お見事、さすがだな。】

【あんたこそ強かつた、俺ら相手に善戦したやつはお前が初めてだよ。】

【それほどでも。これでもまだ三日しか徹夜してないし。】

【お、こつちもまだ三日だ。】

【…………よし、練り歩くか。】

…………とこんな感じで『^{くうはく}時空』と『??』のゲーム練り歩きが続いた。

《翌日》

〔『??』! 次はどこ行く?」
時空

【すまん、少しメールを消費してからでもいいか?】

【オーケー!】

【そんな感じで『??』と『』の通信は一度切れた。
時空 くう はく

〔『??』サイド

「ふう…やつと終わつた…」「強いな…」

暗闇に光るパソコン画面に移されているメールを読み進める青年、すると青年の目を惹く内容のメールが届いていた。

〔件名：『??』さんへ〕

【君は生まれる世界を間違えたとは思わないかい?】

その瞬間、運命の歯車が狂い出す。

『　』と『?』（空白と時空）

【件名：『?』さんへ】
時空

【君は生まれる世界を間違えたとは思わないかい？】

「…………なんだこいつ…」

『?』はイラついた様子で指をキーボードに叩きつけながらメールの相手に返信した。

【誰だお前。】

すると相手から返信が帰ってきた。

いや、それは返信だったのだろうか。

【僕と一つゲームをしよう。】

「…………へえ……この俺に挑む奴なんて久しぶりに見たな。」
時空

『?』は少し警戒をしながらもそのURLをクリックした。するとがめんに写っていたのはチエス盤だった。

【チエスか…】

『?』はつまらなそうにしながらも謎の人物との対戦を始めた。

「かつつったあああ!!!」

『??』^{時空}は大きく体を伸ばすと肩が元あつた所に戻る音がした。そして勝利の余韻に浸つていると一通のメールが届いた。

【お見事、しかしさぞこの世界が生きにくくないかい?】

「……チツ……チツ……」

【五月蠅え、余計なお世話だ。】

【もしも、全てがゲームで決まる世界があつたら?君の意見を教えてくれるかな?】

「ほう……」

「?? ?? ??? ???, ?? ??? ?? ? ???? 『もしもそんな世界があるのならば俺

は生まれる世界を間違えたわけだ。』

刹那、パソコンにノイズが走る。しかし『??』^{時空}は落ち着いた様子で近くのバッグを手に取る。そしてパソコンの画面を軽く叩く。

「僕もそう思うよ!君はまさに生まれる世界を間違えた!」

「あそう。ならお前が生まれ変わらせてくれんのか?」

不敵な笑みを浮かべる『??』^{時空}、するとパソコン画面から白い腕が生える。

『??』はその腕

を掴むとパソコンの画面に吸い込まれていった。

「なんだこれええええ!!!」

「にいっ！」

「ひやつはああああああ！」

『时空??』は何処ぞの梨の妖精のような雄叫びを上げ、近くの二人組は現状を把握出来ていないようだ。そしてもうひとりの青年が口を開く。

「ここが君ら3人が夢見る理想郷、『盤上の世界・ディスボード』っ！この世の全てが単純なゲーム決まる世界っ！そう……人の命も、国境線さえもっ！」

「あ……あなた誰っ？」

「世界と世界を行き来させられるのは一つしかねえよ、お嬢ちゃん。」

「貴方も誰っ？」

「俺は麺魏りょうぎだ、ちなみにあつちは差し詰め神さまだろ。」

「そうだよ♪♪」

少女を抱えている青年を置いてけぼりにして話す3人に割つて入るように青年が口を開いた。

「おいお前ら！それどころじゃねえ！落ちる！死ぬ！」

「神様後は頼んだ、俺は寝る。」

「おやすみ♪」

地面が迫り来る中青年は少女を抱き抱え、麺魏はその後の全てを自らを引きずり込んで神様に後を任せて眠りだす。地面にぶつかる直前、落下していた体が止まり体がゆっくりと地面に降りる。

「再び会えることを楽しみにしているよ。そう遠くないうちにね♪」

そうして元々眠っていた麺魏りょうぎを除いた二人の意識は暗転した

Fantastic World (ゲームで全てが決まる世界)

「ん…よく寝たな…」

間抜けた声を出すのは『??』時空こと魑魏である。

「ほら、若いの起きろゝ朝だぞゝ異世界だぞゝ」

「いてて…呑気だなんた…」

「うう…変な夢…見た…」

「だがしかしそれは夢ではないのだ。」

華麗に夢オチフラグをへし折つた魑魏は周りを見渡して一つの街を見つけた。それを青年に伝えると

「お前よく見えたな!?"」

と驚かれた事に不機嫌そうにしながらも自己紹介もせずにその街へ歩く事にした。暫く歩くと街道の道のようなものが現れたのでそこに沿つて歩いて行くと第一難関の山賊に出会う。

「いい人生だつたよ…」

「へへへつ……こを通りたきや俺らとゲームしな！」

「…………ポリ公仕事しろよ……なんでこんな山賊が残つてんだよ残飯でも食つてろ盗賊ども……手前らとゲームする義理なんざねえよお前らなんて所詮大した事ないだろ。」

「なんだう!?」

そうして青年たちを待機させて数時間麴魏の罵倒大会が続いた。

《エルキア王国》

「にい……ここ……賑やか……」

「何があるんだろうか?」

「国王選定戦らしいぞ? あつちのめっちゃ強いのがクラミー・ツエル、あつちのポーカーフェイスを知らんのがステファニー・ドーラだそうだ。」

そんな感じで話していると麴魏は重大な事実に気がついた。

「あ………」

「どうした?」

「俺お前らの名前しらねえや。」

「…………俺は空、こつちが白。二人で一人のゲーム……」

「……『くうはく』か……」

あつさりと二人の台詞を取ると白が麴魏の裾を引っ張る。

「よろしく……ね?…………『??』さん。」
時空

白に正体を暴露された麺魏は楽しそうに目を細め、一人の女性に話しかける。

「なあ、お姉さん。あんたは戦わないの?」

「私はこれさえあれば十分よ。」

女性は不敵な笑みを浮かべつつ現金の入った袋を軽く叩く。その袋を見据えて矢継ぎ早に麺魏は言葉を紡ぐ。確実にゲームに持ち込める方向に。

「まあそうだよな? 腰抜けは蓄えがないと怖いらしいしなあ?」

「…………あんた:喧嘩売つてんの?」

「ええ、そりや勿論☆」

そうしてブチ切れた女性は麺魏にゲームを挑みイカサマ返しで撃破。その後に勝負を仕掛けた男性もあつさりと撃破された。麺魏が仕入れた金で空が交渉、見事に四泊五日を手に入れた。

「にい:あの人:出来る。」

「あの人つて誰だよ:」

「あそこの:虚ろな目:の白髪の女性。」

水を飲みに行つた麺魏を待つ『くうはく』の視線の先には一人の女性がいた。少しほさぼサな白髪をたなびかせ、曇つた紫色の目で『くうはく』の前を通り過ぎる女性は一人の男性に

勝負を挑む。

「貴方…私と勝負しない?」

「おう!いいぜ!何にする?」

「ポーカー。ちなみに私はこれを賭けるわ。」

懐から取り出したのは一枚の貨幣。しかしその一枚の貨幣を取り出した瞬間彼女の表情が曇った。

「にい…あの人…あのが最後…」

「ああ、多分あれしか持つてなかつたんだろう。可哀想に。」

「ただいまゝつてどうしたどうした?」

『くうはく』の二人は丁度良い所に来た!と言わんばかりの表情で龜魏を見た。そして訳を話すと龜魏は口を開く。

「任せとけ。」

『時空』には『くうはく』以外に対する敗北はない。』

そこには不敵に歪んだ麿魏のゲーマーの笑みが浮かんでいたという。

Flowering of talent (『??』の本気)

白髪の女性 s i d e

「くつ……」

「おら！姉ちゃんもう賭けるもんないのかあ？」

私は最後の硬貨を賭けて負けてしまい、相手の男が嘲笑の笑みを浮かべている。最悪だ。こんな筈ではなかつた。計算が狂つた。私が諦めて自らの命を賭けようとした時、隣になもしらぬ青年が座つた。

「俺が肩代わりしてやるよ。お姉さん？」

その青年は楽しそうに相手を見据えると高価な指輪を机に置く。

日本円であれば数百万は下らないだろう。男がにんまりと君の悪い笑みを浮かべるとカードが配られた。

「そのかわりおっさん、あんたは有り金全て賭けろよ？このお姉さんが有り金全部賭けたんだから。」

「わかってるよ。坊や……」

青年は坊や呼びが気に食わなかつたのかスマホをいじりだす。彼も異世界人だろうか：まあそんなことは後できけばいい、とにかく今は勝つのが優先だ。じゃなければこの青年に申し訳がつかない。

暫くして男は身ぐるみも剥がされて宿の外にほっぽりだされたそして私の前に3人の男女が座る。勿論さつきの青年も座つている。

「俺は空、んでこつちが白だ。」

「俺は麅魏、まあ好きによんでもくれ、お姉さんは？」

「…………禍音。戦歴は唯一神と一戦中一勝。こら辺にいたおじさん連中と152戦中

151勝1敗。」

「俺ら』』は唯一神と一戦中一勝。麅魏とは72戦中72勝。俺ら』』に敗北はな

い。」

『時空

『』こと俺は唯一神と一戦中一勝。こいつらとともにこつちにきた。あんた、アカウントネームとかあるのか？』

私のアカウントネーム…………将棋のアカウントでいいや。

私は『鴉』。禍音でも『鴉』でもどちらで呼んで貰つても構わない。』

レイヴン

「よろしく……ね?」

こうして禍音こと『鴉』^{レイヴン}は『くうはく』と『??』^{時空}の仲間になる事になった。私たちが部屋に向かう時に空がステファニー・ドーラつて子に何か話しかけていたけれど私は何があつたのかわからない。しかし少なくともこの後の運命を大きく歪める事になるのはわかつた。なぜなら私の左目が『運命が歪んだ』という結果を導き出したから。幼い頃からの私の闇が私の中で揺れ動いていた。

私はこの闇が彼らに牙を剥かない事を祈る。
確か無名の王が言つていた。

『最強は牙を磨く、弱者は知恵を磨く、牙を挽がれた最強は焼き付け刃の知恵を磨く、しかしその知恵は所詮贋作でしかない』と…

私はその意味を知らない、何故が意味を覚えられない。記憶喪失だろうか、それでもおかしい。記憶喪失なら全てわからない筈だ。もしかしたらわかりたくないだけなのかもしれない

悪夢（n i g h t m a r e）

私は小さい頃に父親と母親を大きな交通事故で亡くした。そして孤児となつた私は母方の祖母に引き取られた。祖母は私にこれまでに無い程に優しくしてくれた。祖母の作つた胡瓜、あれは本当においしかつた。学校のお弁当のデザートとしておはぎが入つていた時はとても嬉しくてはしゃいだこともあつた。小学校の頃は楽しかつた。しかし中学校に入ると同時に祖母が死んだ。大腸がんだったらしい。そのあと私は父の妹だという人に引き取られた。

しかしそこの生活は常軌を逸したものだつた。食事は満足に与えてもらえず、睡眠の時だつて一度寝てしまえば骨が折れるまで木刀で殴られた。学校ではいじめの対象になつて殴る蹴るの暴行は当たり前、時々上履きに画鋸が入つていたこともあつた。そんなある日、我慢しつづけていた私は遂に壊れた。

「ふふふつ……あははははっ!!みんな死んでしまえばいいのに!」

結局その時は丁度近くをパトロールしていた警察官が来て止めてくれた。父の妹だ

と言つていた女性は結局傷害罪と脅迫罪で懲役となつたらしい。私は虐待による精神崩壊の為刑事責任能力は極めて低いとされて釈放された。そのあと私はその警察官の紹介でとある大きな研究機関に護送された。

「ふふふつ♪貴女が■■■さんね、よろしく♪」

あの時の名前はもう忘れてしまつた。しかし私はその人から貰つた名前は覚えてい る。

「■■■さんじやなんか味気ないから貴女はこれから “禍を音にして告げる者”『禍音』 とするわ！」

私はそれ以降禍音と名乗るようになつた。そして彼女の発明した『運命魔眼』とかつていう魔道具を左目に埋め込まれ、私が良い運命に進めるようにと自分を保護者として高校に通わせてくれた。しかしどうしても行く気になれなかつた私を見て彼女は問題集や参考書をたくさん買つてきてこう言つた。

「今日から私の部屋で勉強するといいわ、高校に行きたくないのに無理やり行かせるのも良くないからね。わからないところがあつたら言つて頂戴。これでも東京大学を卒業してやるから。」

そして私が自立出来るようになるまで私は彼女の部屋で毎日勉強した。時には素数、時には憲法、時には歌も歌つた。そして私は一人暮らしを始めた。私はゲームに出会

い、最大限に実力を発揮した。そうして私はゲームのオンラインランキングで4位になつた。私は彼女のおかげでここまで上り詰めた。のちにテトに出会い、新しい世界で私を超える3人組に出会えたのも彼女の発明品のおかげだ。彼女はいつも私をきにかけてくれた

今も元気かな……私の心の恩人であり私の心の母親、

——『ティアラ・ニルヴァレン』は……

ステファニー・ドーラ

『夜』

宿について熟睡していた禍音だが夢で目が覚めた。

「ん…」

「へアッ!?」

禍音の起きた時の寝ぼけた声で目を覚ます麤魏、それを苦笑いしながら見ていた空が突然ノックされた扉の方に視線を向けた。

「俺が出るよ〜ん…」

とても眠そうに麤魏はふらふらと扉に向かい、ドアノブに手をかけるとその扉の先には先程空が話しかけていた少女、ステファニー・ドーラがいた。

「中に…入つてもいいですか？」

「まあ…寒いからさつさと入つて。」

麤魏が軽く突き飛ばすように室内に押せば禍音がタオルを持って受け止め、扉を閉めた。麤魏が近くの壁にもたれかかって二度寝再開したところでステファニーは口を開いた。

「どういう…事ですの…」

「あん？ 何が？ あ、こいつは俺の妹な？」

「空、多分そこじやない。」

「昼間言いましたわよね：イカサマをされていると…」

「言つたな。」

いつの間にか起きていた麤魏は相槌を打ちながら嘲笑うように言葉を続けた。

「負けたんだろ？ どうせ。」

「ええ、負けましたわよおつ！ これで何もかもお終いですわつ！」

「麤魏：何故お前は火に油を注ぐ事しか出来ないんだ？」

麤魏は「負けて当然」と言つたような表情を浮かべた。白も同じ事を思つていたのか興味なさそうに空の膝に寝転がる。一方禍音は……

? you are winner!

興味が無いのかあるのかわからないがノールツクゲームに勤しんでいた。それを見て空は何かを見つけたような楽しそうな表情で言葉を紡ぐ。

「ま、負けても当然って感じ？ 保守的な挙句怒りの沸点が低い、そしてあんなイカサマも自力で見抜けない、さらに言えば負けたからと言つて他人に八つ当たり、これが前王の子孫なら負け込んで当然。」

「雑魚と言われてもしやあねえやな。」

「撤回しなさいっ！」

ステフは耐え切れなくなつたのか消え入りそうな声でつぶやく。

「おん？　“展開しなさい”？」（グ↑腹の音

「アホ、　“撤回しなさい”だ。」

馬鹿馬鹿しいボケをかます麴魏は放つておいて空はステフとの会話に戻るのであつた。

禍音 side

私は暇な為ノールックゲームに勤しんでいる。しかしながらと不穏な空氣。そう思つた私は立ち上がりドアのところに座るとイヤホンをつけて曲を聴くことにした。

語り手 side

ステフが空の言動に耐え切れなくなり殴ろうとするもそれを空は手を叩く事によつてキャンセルした。もちろん手を叩いてキャンセルせずとも盟約によつてステフの手が届くことは無いが。

「それじゃあゲームをしよう。俺はパー以外を出したら負けとする。ちなみにパー以外で勝つたら引き分けな。」

その後いろいろと説明して空とステフはジャンケンをはじめることがある。

「お腹すいたなあ…何かない？」

「はい、カロリーメイト。」

空腹を訴える禍音とカロリーメイトを渡す麺魏は無視することにしよう…

異邦人

?ステフの家?

ステフは今、とても不可解な点を思い出そうと口を開く。

「……ところで一ついいですか?」

「…………質問は挙手をしてから。」

ステフ（ステファニアードと長い・難解な為空が短縮した。）が何故白と禍音の二人と一緒に風呂に入っているかというとこういうことがあつたのである。

?お宿?

「じゃーんけーん」

「ポンッ。」

結果はステフがチヨキ、空がグー。勝手に乱入した禍音もグー。と言う結果になつた。そしてそのあと要求の時に
「俺に…………惚れろっ!!」

「…………… what?」
「…………… ??」

意味がわからず英語で問い合わせる禍音、韓国語で威圧する魑魏。それに気づかずに空は言葉を続けた。

「ほら、よく言うじやん、『惚れた弱み』ってやつ?」

「先生。」

「なんだね禍音くん。」

「俺の所有物になれ』じゃダメなんですか?」

「……………ん? あれれれ?」

……………と、んな感じで色々とあつたのである。

勿論この後 gd gd な為割愛します。

?ステフン家?

「…なんで私はお風呂に入らされてますの? しかもシロとカノンと一緒に…しかもカノンはお風呂今までゲームしてますわよ!」

「そんなことを言つたら負けだよステフ。諦めなよ作者（NW）が面倒くさがるからそういうのは。」

「メタイですわあああ！」

…としばらくしようもない話をしてから上がると空と白、魍魎は問題が発覚した。

「…………着替えがねえ…」

「えつと…どんまい…」

「今そこに服ありますから早く服を着てくださいな!?」

「なんで禍音は服あんだよ〜」

禍音は魍魎の力のない文句をきつぱりと無視して着替え、近くにあつた紅茶を一口飲む。それから近くにあつた本を何となく手に取る。

「あれ？この言語…日本語じやない…？」

「二ホンゴ…？何ですのそれは？」

「なんでもない、法則は読めたし一応この言語は攻略かな。」

しばらくスマホと本と睨めっこをしてから禍音は『言語を覚えた』と言うのだ。そのあと空と白、魍魎も解読してステフが驚いたのは別のお話。
「なあ…魍魎、この世界守りたいと思えるか？」
「…………前の世界よりはるかにいいよなこの世界は。」

「…ステフ、国王選定戦はいつまでだ？」

「今日までですわ！」

禍音、魑魏、白、空は集まつて何かを話したと思えば教会の方に歩みを進めた。そして扉の前で空は呟いた。

「よし、じやあちよつくら “国王” になつて来ますか！」

「頑張れ！」

「私たちは補佐に回るよ。」

「了解、んじやあ派手にやるぜ！」

「応!!」

クラミーＶＳ『』

「さて、この者、クラミー・ツエルにもう挑むのはおらぬか？」

そう司祭が告げ、辺りをキヨロキヨロと見渡す。か、しかし暫くしても立候補者がいない。至極当然である。連戦連勝。ずっとそういう形で勝ち上ががつてくれれば権利を持つていない、もしくは権利があつてもどうせ負けるだろうと言う気持ちができてしまっているので挑戦者もいなくなると言うものだ。司祭はそれを確認すると口を開いた。

「それでは今、この時をもつて、次期国王、人類種の全権代理者をこの者、クラミー・ツエルに……」

その時クラミーは扉に視線を向ける。

「戴冠させ 「意義ありいい!!」

突然扉が開けば新たな咆哮が戴冠の邪魔をする。そこにいたのは異世界人の『くうはく』とステフだ。クラミーは「まあ来ると思つてた。」と言う表情を浮かべていた。

「なんだ貴様らは！」

「え？ 通りすがりの一般人その壱。」

「通りすがりの一般人…その…式？」

「私はそのどうはん 「あら、三人ともやつと来たのね？ 来ないのかと思つて逆にヒヤヒヤしたわ。」 扱いがひどいですわ：（泣）」

「それで？ 要件は国王になるためにここにきた、かしら？」

「まあエルフに媚びてる娘に国王になられてもねえ…あ、俺は一般人その参ね？」
もちろん一般人その参こと魑魏の言葉に周りの大人（子供もいるかもしね）からざわめきが起ころる。

「何つ!? エルフだと…!?」

「許さぬ！」

「k a w a i i に罪なしつ!!!」

…………最後のは放つておいて…と、まあこんな感じで後ろでガヤガヤと騒ぎ立て始めた観客（ガヤ達）を尻目に空は、白に合図を送る。
(いたが?)

そして白は眉間に皺を寄せて「いない」と合図を送る。しかしここで空の視界には救世主が見えていた。先日ひよんな事から仲間になつた禍音だ。彼女はエルフを見極められたらしく白に手話で「い・た・よ」と合図を送つてゐる。空は目線で「白の合図と

ともに目立つように頼む」と言うと大きな丸を描いた。空はこれは確実だ、と安堵しながら口を開く。

「だからさあ、例えばそこの森精種エルフと結託して勝とうとしてるやつに、この国は渡せないよなあ!?」

と、台詞と同時に指差したその先には、姿を表し、禍音にフードを没シユートされている森精種エルフがいた。もちろん森精種エルフだつて魔法のプロだ。自惚れではないが魔法に自信はあつた。あくまでも無表情を貫いているが森精種エルフはこの事態をどうするかを考えていた。

「……へえ。何処にでも居そうな森精種エルフと結託して、私を他国の間者に仕立て上げようつて魂胆?」

「ほー。咄嗟についた嘘にしては悪くねえじやん。」

「いや、案外想定済みだつたりするぜ?まあ関係ねえんだつたら追ん出してもOK?」

「構わないわ。」

禍音は老人を労わるかの様に背中をさすりながら外へ出して行く。ちなみにその途中で森精種エルフの頬をつづいて遊んでいたのは別の話。

「…禍音…森精種エルフの写真とりすぎ…」

「あとで送つてもらおつと。」

まあそれを見送る間白と麤魏が関係のない話をしていたのは別の話。

「んじや、g a m e s t a r tといきますか？」

「ええそうね。でも、せつかくの最終決戦よ。なんなら、国王になるにふさわしいゲームの方がいいんじゃない?」

「ふーん。十の盟約その五『ゲーム内容は、挑まれた方が決定権を有する』か……。いいぜ。受けてやる。」

「おつとこでクラミー選手の『カリチュマ』が炸裂するか!?」

二人で真面目にゲームの話をしていると後ろから馬鹿馬鹿しいナレーションが入ってきて司祭と麤魏本人以外はすっ転んだ。

「もうっ!ペース持つてかれちやうじやない此奴なんかに!」

「一般人その参つ!『カリチュマ』ってなんだよ!?」

…………ど、んな感じでgd gdと決戦の幕が切つておとされたのであつた

女の子を泣かせた罪

『中庭』

中庭では空達がワクワクしながらゲームを待っていた。

「さて、どんなゲームでくるかな…」

「禍音、森精種の写真頂戴？」

「わかった。……送ったよ。」

「わ、わ、私は魔法でイカサマされてましたのッ!?」

「今更!?」

今の状況を説明すると上の台詞からどんなゲームでくるか楽しみにしている空、禍音が撮つた森精種の写真を繋がるはずのないメールで入手する白、今更魔法を使われていたと理解したステフにそのことに驚いた魍魎である。そんな状況の中空が口を開いた。

「あ～…えつとまず魍魎、お前どうやつて入つた？」

魍魎は少し考える様な仕草をして誇らしげに話し始める。

「えつとまず一般人に紛れて侵入、そして一般人の人混みの中で最も空達の元へ近
魔法が見えない人達

寄りやすい場所に割り込んで乱入するつてな感じ。」

サラサラと行つた事を挙げていく麺魏が話し終えるとステフが不服そうに口を開いた。

「今^{イマニテイ}人類種の悪口になつてた様な気がするのは私だけですか?!」

「うん、そうだねえ。でしょ? 白ちゃん。」

「気の、せい!」

“粉碎・玉碎・大喝采!”とはこの事を言う。あつさりと論破されたステフの不服は

虚空に無として散つたのであつた。しばらくそんな感じで話しているとクラミーが

『達^{異世界人}の前に現れる

「さて、何処かの国の間者さん? 準備が出来たわ、付いてきて頂戴。」

「んじや頑張つてね!」

「二人ともファイト。」

そしてクラミーと空と白は馬車に乗つて目的地に向かつた。その馬車が止めてあつた場所の近くには黒ズボンに白シャツ、その上に白衣を羽織つた金髪の女性がいたとかいなかつたとか。

《観客席》

観客席の前には大きなチエス盤の様なものがあり、その上には大きなチエスの駒が

あつた。

「ルールは簡単よ。声で指示を飛ばす。その代わり一つ言つておくとこの駒達は“みんな意思があるわ”。覚えておきなさい。」

チエスの駒全てに意思がある。その言葉に反応したのは空と白だけではない。もちろん観客席にいた魑魏とて反応した。しかし最も大きな反応を示したのは禍音だつた。
 （このゲーム：知つてゐる：ティアラが教えてくれたゲームにそつくり：いや：全て同じ！）

禍音は観客席を出ると空達の元へティアラに貰つたコートを羽織つて走つた。しばらく走ると扉が見えたのでその扉に手を添える。するとそこに何もないかの様に体がすり抜ける。そして空達の後ろにたどり着くとコートをこつそり脱いであたかもいたかの様に振舞つてゐる。

「あら？ ひとり多くないかしら？」

「氣のせいじやね？ 元から俺と白、ステフ、禍音の四人だぞ？」

まるで打ち合わせをしていたかの様に口裏を合わせる空、そうしてゲームは問題なく行われることになつた。

「んで…何があつた？」

「このゲーム知つてる…このゲームはチエスじやない、チエスの道具を使つた戦争シユ

ミレーションゲームだよ！」

「わかつた、教えてくれてありがとな。白を傷つけないで済む。

そんな会話を終えると禍音は扉にもたれかかる。空は白を抱き上げると自らの得意なゲームをする為に息を思い切り吸つた。

? 禍音? 聞こえる? 私よ私。?

? テイアラ? どこにいるの??

? 貴女の近くよ。大丈夫、きっと貴女の側に行くから。ね??

? うん、待つてる。?

? ところでフィーの写真送つてくれない??

? フィーって誰??

? 貴女がパシャパシャ撮つたエルフちゃん。彼女フィール・ニルヴァレンつて名前な
のよ?

? 姉妹? 親子? 親戚??

? 親戚よ、とにかく送つて頂戴。いい??

? 送つたよ。?

? あらまあ、禍音には劣るけど可愛い。?

? ……親馬鹿……?

?ちつ！違うわよ！？ただ単純に親として貴女が可愛いからツ！？

?それを親馬鹿って言うんだよ？ティアラ大丈夫？私があげた広辞苑で調べ物ちゃんとしてる??

?ち、ちゃんとしてるからね！？

?そつか、よかつた。？

?じやあおやすみ。？

ほんの少しの間の心の親との魔法での会話。禍音はそれを行なつて改めて近くにいる事を把握した。そして目を開くと…

「う…………うわあああん！」

「…………ゑ？（～・▽・～）」

そこに広がっていた光景は子供の様に号泣するクラミー。

「森精種エルフの力、取り付けてつ：反故にするのにいつ：ファイールに協力して貰つてえつ……いつたいどれだけ面倒なやりとりやつてきたとおもつてんのよおつー！本気だつたのにいつ：人類みんな助けたかつたのにいつー！」

「…………空？（～言～）（チャキツ」

「うおつ！？ちよつと待て禍音ツ！！落着けええええツ！」

空は振り回された槍を避けながら禍音と鬼ごっこをする羽目になつたのだつた。そ

こには呆れた様子でクラミーをあやす魑魏の姿もあつた

ティアラ・ニルヴァアレン

教会では祭祀が戴冠の手筈を整えていた。あとは異議を唱える者はいないかの確認だけである。勿論その場は静まり返っている。

「それではゲームの勝者、空殿を国王とするが異議を唱える者はいるか？」

「異議：あり。」

「俺らは二人で一人のゲーマーだ。国王は二人にさせてもらう。」

禍音の義母、ティアラ・ニルヴァアレンは魔法で老人に変装して『くうはく』を見据えていた。異議を唱えた一人のいちやもんを聞くと祭祀は口を開き、かいとうした

「不可能だ。」

「え、なんで？」

「十の盟約で『全権代理者』をたてるよう決められております。二人にはできませぬ。」

そう言う祭祀の顔を殴つてやろうかとも考えたがここはそのまま異議を唱える事にして手をあげるティアラ（老人に変装中）。

「一つ…聞いてええかの？」

「ん？どうした爺さん。」

(せめて婆さんと言つて欲しかつたわ……)

「十の盟約に『全権代理者を二人にしてはならない』などとは明記されておらんがのう……そこはどうなんじや？ 祭祀殿。」

「あ…………」

「うん、明記されてないよね。だつて十の盟約では、『七つ』集団における争いは、全件代理者をたてるものとする。『二人じやいけない』なんて書いてないよ？」

そのあと祭祀は麤魏に殴られかけたが十の盟約で思い切り防がれた。

?エルキア城?

「クツソ……マジであるジジイのおかげで空達兄妹で国王に出来たよ……」

「ジジイとは何じやジジイとは……」

「あ、爺さん。お疲れさん。」

ティアラ（老人）が近寄り麤魏と空が爺呼ばわりすると禍音は不愉快そうに眉を潜めた。

「どうかしたのか？ 禍音。」

「人の親に“ジジイ”とか“爺さん”とか言わないで貰つても？」

「え?!このジジイお前の親?!盛つてんなジジイ!!」

「……さつきから人が魔法で変装してれば貴方は：女性にジジイは酷いんじゃない？」

ティアラはそういうと変装を解いて麤魏の頭をグーで殴った。ついでに空のスマホのメアドを自分のスマホに登録する。

「え…森精種!?」

「これはこれは…」

「にい…写真の森精種と違う…」

「あの人是ファイルって言うらしいよ？」

予想外のティアラの登場にみんなそれぞれの反応を示したが特に麤魏は頭を抱えながら驚いていた。ちなみにティアラから空のスマホに送られてきたプロファイルには絵文字で小躍りすると言う器用な芸当をしていた。

「絵文字可愛い…」

【内容（最終文）】よろしくね～、（*、＊）（＊、＊）（＊、＊）（＊、＊）（＊、＊）（＊、＊）（＊、＊）ノ

「女子力高いな禍音の義母さん。」

「私のお義母さんだからね。＜（＊、－、）＞」

ティアラの女子力に胸を張る禍音であつた

『』と『?』、『鴉』の設定

☆ 魏りょうぎ

黒の短髪、黒目。アカウンント名は『?』、日本語訳すると？時空？となる。本人は結構めんどくさがりではあるが『』の次に強いと言われる実力者。普段は両手両足で『』の相手をするがチャレンジャーが現れると急に手加減し始めて相手が500人いようとも一人で全て捻り潰す。しかし今まで『』に勝てたことはない。平日はコスプレイヤーをしており、時々空たちにコスプレの写真を送つて撃沈していることもある。年齢は16歳。そのため時々女装するかどうかをかけてゲームをして負け、女装の写真を送らされるという屈辱を味わせられた経験もある。服装は灰色のパーカーにジーンズ、両手に指の出る手袋をしている。持ち物はpcタブにスマホ、バッテリーが1個に狐の面、マルチケーブル1本にモバイルバッテリー1個、カラーコンタクト、耳栓。

★ 祸音かのん

白色の長髪ストレート。その目は紫、整った顔、服装はシャツに黒のロングスカート。寒いと漆黒のコートを羽織る。頭を撫でられると艶のある声が出てしまう。頭が良す

きていじめを受けて引きこもりとなつた20歳。普段駆け引きはそこまで上手ではないがゲーマーが相手だと人が変わつたかのように駆け引きを行う。その実力は少なくとも空の下位互換くらいの実力はある。人が傷つくのが嫌いで戦争趣味レーシングゲームなどのほかの生き物に戦わせるゲームが苦手（勿論一人で特攻してトップ）。特殊な持病を持つており、細かい作業や高速で腕や手を動かしたりすると右腕が痙攣を起こす。（↑ここ重要）そのための薬として煙管タイプの吸引機を常にポケットに入れている。デイスボーデに来た時はスマホ、ノートパソコンとタブPC、バッテリー10個にソーラーチャージャーとケーブル1本、DSP1台。煙草タイプの吸引機、トランプ、広辞苑。

★ティアラ・ニルヴァレン

元『デイスボーデ』の住人。禍音の親代わりで普段から白衣に黒ズボンに白シャツ。金髪で性格はしつかり者。ゲームはそこまで上手ではないがイカサマは大の得意。一度強盗の変装を見破つた事もあり、パチンコでは魔法で確実に、そして自然に当たりが出るようになっていた。その影響で住んでいたところの近くのパチンコ屋からは全て出禁を食らつてはいる。この事に関して本人は『いやあ、出来心つてやつよ。あなたはわかる？お金がどうしても欲しい時にイカサマしちゃう人の気持ち。』と言つてはいる。元々ギャンブル依存症ではない為出禁を食らつてもしつとしている。

●REC

「……ん？ もう映つてんの！ 空ー白！ 罪音！ 急げもう始まつてんぞ！」

「んん…あと五分…」

「罪音…もうお昼よ？」

「俺と白はもう準備できてるぞ～…」

「で？ 何をいうの…？」

「こうこうこうで…そう、そういう事。」

「それでは皆さん！」

「「「「」」」これからもご愛読、よろしくお願ひします！」

痘攣と苦痛

？エルキア城？

「ロイヤルストレートフラツシユ。」

「つ…………もう一回つ……」

いま、『くうはく』と禍音はポーカーで勝負していた。ちなみにティアラは用事があるらしくその時はエルキア城に居なかつた。

「なあ、空。お前容赦ないなあ……」

「こんだけイカサマしても何にも言わないで再戦挑んでくれる禍音つてやつさし♪最高じゃねえか」

空はそう言いつつ禍音にカードを渡すと禍音はハイスピードでシャツフルを始めた。しかし暫くシャツフルするとカードが突然禍音の手からこぼれ落ちた。

「ん？ 禍音大丈夫か？」

「だつ：大丈夫：」

しかし禍音は手が痘攣し、カードがうまく撮れない。空はそれを見るとさつさとカードを拾い上げてやり、耳元で呟く。

「今日はもう休んどけ、疲れてるのかもしれない。」

「つ…大丈夫つ…」

「大丈夫…じゃない…よ…ね…?」

「まだ私は…………つ！」

禍音は急いで立ち上がるが右手を見れば細かく痙攣している。それを見た空は禍音のそばに寄つて右手を撫でてやる。

「別に急いで俺らについてこなくともいい。今は痙攣した右手を治すことに専念しな。」「つ…」

「そうだぜ？あまり急ぐと自分の首を締めることになるかんな。」

禍音はそれを聞いて俯きながら自室に戻つた。それを見つつ『くうはく』は魑魏とボーカーを始めた。

「すうつ…………ふう…」

禍音は1階の自室で煙管に入った何かを吸いながら窓の外を見ていた。右手の痙攣は病気の影響で、速い作業をすると右手がどうしても痙攣してしまったために煙管型の吸引機を使用して薬を吸っていた。

「…………空…私はね…? 今以上に貴方達に頼つて迷惑を掛けるわけにはいかないのよ

」

そう言つて窓から飛び出てとある所へ向かつた。

『謎の大図書館』

「…………」

大図書館に着いた禍音は扉にかけられている看板らしきものを見た。

— "This is my library. no Trespassing"

『ここは私の所有している図書館です。立ち入り禁止です。』

「…………ごめんね……所有者さん……貴方に用事があるから入るね……」

そう呟き、禍音は図書館の扉を開く。そしてそつと閉めれば足音を立てずに図書館を歩いた。

暫く歩いていれば中央の円卓にティーカップを用意している天使がいた。

「…………綺麗。」

本棚の陰からその天使を覗き込んでいれば一つの本棚の陰にその天使が隠れたと思えば後ろからぽん、と優しく肩を叩かれた。

「…………!?」

「初めまして、私は天翼種のジブリールと言います。貴女のお名前は……まあいいです。

どうせ人類種でしようし。」

「ジブリール。私とゲームをしてくれない?」

ジブリールは少し目を見開けば真面目な表情を浮かべる。

「…………何をかけるのですか?」

「異世界の知識と私の命。異世界の知識は机に置いておく。もし貴女が勝つたら私を自由な殺し方で殺してくださいよ。」

「…………異世界の知識だけいただきます。人類種の命は安すぎて受け取れません。私は何をかければ良いのですか?」

「…………私が勝つたら負けるまで同じ条件でゲームして。私はそれで自分の弱点を見つけたい。」

死に得ぬ天使と定命の人間



禍音がジブリールにゲームを挑んではや一週間。

「まだ…まだやれる…まだ弱点が見つかってないツ…」

「もう止ましよう？私は休まなくとも動けるとはいあなたは人類種、このままでは死んでしまいます。」

「わかってるツ！「わかっていませんツ！！貴女は一体何日徹夜したかわかっているのですか？わたしからすれば一瞬に近いですがもう一週間ですツ！！貴女にとつては重大な負荷ですツ！！このままでは貴女は本当に死んでしまいますツ！！早く眠る事を推奨しますツ…」：五月蠅いつ…私はツ…休んでいる暇はないのツ…このままじゃつ…仲間に：いや、私が勝手に仲間と思い込んでいるだけかもしれない…空達に…迷惑はかけられないツ…」

禍音が息を切らせながら立ち上がりればそのまま倒れ込んだ。

「…だから言つたではありませんか…」

ジブリールは禍音をベットに寝かせて本の整備に戻った。

「ソラ！シロ！リョウギ！」

「おう、ステフ。どうした？」

「カノンが部屋にいませんわ！」

その言葉を聞いた瞬間空と白はスマホを取り、王座から飛び降りる。麪魏は窓から飛び降りて外を探しに行つた。

「白、俺は何が悪かつた？」

「多分…追い詰め…られて…た？」

「…迷惑をかけたくねえって訳か…急ぐぞ！」

空は白を背負つてエルキアの半分に向かつて走り出した。残りの半分を麪魏はステフを連れて捜索に動き出した。

麪魏はステフに有名処を案内されてもらつていた。

「ステフ！ほかに何処か有名なところないのか！」

「ありますけどそこには天翼種が居て入れませんわ！」

「畜生！」

龜魏は半ば八つ当たり気味に言葉を吐き捨てればそのままざまざまなところを探して走った。

空と白は大きな建物の前に立っていたがその立札のためか入つていいのか困惑していた。

「…………入るぞ……白……」

「わかつ……た……」

空は意を決して扉を開けばくるのがわかつていたかのようにジブリールが扉の前で浮いていた。

「うわあっ！？」

「おや、貴方がソラ、という人類種ですか？」

「あ……ああ……」

ジブリールは本を本棚にしまえば空の前に降り立ち、言葉を紡いだ。

「貴方達の目的は分かつています。しかし彼女は今眠っていますのでお引き取り下さい。」

「…………却下する…………と、言つたら？」

「…………はあ…………引き取らないと言うのならば…………ゲームで打ち負かし…………無理矢理にでも追い返すまでですよ!!」